

吟味してそれに入浴の存するを明らかにし、神佛對立の時期を経て神皇への發展を説き、最後に神皇の本義とは神皇一如の御關係なることを記してゐられる。本章の如きは單に公家文化の研究と云はんよりは、我が國體に對する著者の熱情を最もよく表現したものと思はれる。「氏神信仰」は特に梅宮に關する研究で啓發せらるゝ點多く、最後は「朝儀式」の一章をもつて結びとしてゐられる。朝儀史の國史上に占むべき意義を宣揚し、自らその概要を示されたもの、著者多年に亘る公家文化研究の到達點をこゝに示されたと云へよう。

この好著に對する粗々しい紹介の筆が、却つてその眞價を誤り傳へはしなかつたか、また紹介の間々に挿んだ淺學の蕪雜な言辭によつて、先學に對する禮を失ひはしなかつたかを私は深く恐れる。今はたゞ本書が昭和十七年度に於ける我が國史學界の貴重な收獲の一つであつたことを銘記して結びとしたい。(A5版 東京育芳社發行 定價貳圓八拾錢) (林屋辰三郎)

## 蒙古の歐洲遠征

岩村 忍著

題名の示す通り、成吉思汗の十四年(一一一九)に始まつて、爾後數十年を費して行はれた蒙古の三回の大遠征の經緯を語つた書である。全篇は七章に分たれる。その内容中第一回の成吉思汗の中央アジア討伐(第一章)と之に伴つて起つたヂェベ、スプタイの

第一次ロシア遠征(第二章)、次には一二三五年にはじまる第二回のバツのロシア征服(第三章)とハンガリー征服(第五章)、之に併行せる蒙古軍のポーランド、ドイツ、トランシルヴァニア侵入(第四章)、而して二五二年にはじまる第三次のフラゲの西征(第七章)とそれが起されるまでの中間の時期に於ける西歐人の東方旅行の事情(第六章)が述べられてゐる。

申すまでもなく蒙古の歐洲遠征は世界歴史の上の一大事件である。ところが東方の史料は之に關して語ることが頗る少く、その事實は偏に中・西亞並に歐洲の史料によつて知るの他はなく、從つてこの方面の研究は我が國では至つて不振であつたと言つても差支へない。先年著者は、當時ポーランド公使の任より歸朝せられた伊藤述史博士の將來にかゝる年代記古寫本の蒙古の侵入に關する記載についての研究を東洋文庫歐文記要誌上に發表して斯界の注目を惹いたのであるが(東洋史研究五卷一號拙稿書評参照)、またその後「拔都終焉の年次に就いて」(蒙古學報第一號)に於いて洪鈞の誤を匡し、「元史速不台傳の征西記事に就いて」(蒙古學報第二號)その若干の語句をハンガリー語で解き、或は「十三世紀東西交涉史序説」を著し、その西方史籍に關する理解と關心とはみづからはデレタタントと稱しながら、斯界に獨特の地歩を占めてゐる。そして本書の各章には右の諸研究の結果がよくとり入れられ、また其の他にも、われわれがこの方面に關して先づ参照するドーンソンの蒙古史あたりに見えない珍しい史料が色々用ゐられて居り、而してそれが一々「元史」の零碎な記事と對比考證せられて

ある。大に注目せられてよい本であると思ふ。

なほ、これは文部省推薦圖書になつてゐる。

(B6判二一頁 圖一葉 昭和十六年十二月三省堂發行 壹圓四拾錢) (藤枝晃)

### 印度支那 邦人發展の研究 に於ける

古地圖に印されたる日本河に就いて

杉本直治 郎 共著  
金永 鍵

西曆十七世紀の前半より以來、當時南洋に在て活躍中のオランダ人の諸記録が、又之に續く西歐人作成になる諸地圖が、一樣に印度支那を縦斷する第一の大河、メコン河の下流に對して日本河の名稱を適用してゐた、此の事實こそは現存する遺迹の數多からぬ中に在て、獨り近世初期に於ける邦人の目覺しい南洋發展を物語る有力な資料でなくて何であらうか。日本河の研究、其は一見極めて特殊的な取題ではあり乍ら、實は其の背後に見出さるべきかゝる重大なる問題との關係に於て、確に重要な研究と云はねばならない。

大東亞戰下、吾が國の關心が南方の現實に對して異常な熱度を以て注がれてゐる今日、此の問題をとり上げた本書が世に出されるに至つたのは、正しく其の時を得たものと云ひうべきであらう。

著者杉本直治郎氏に就ては、事新らしく紹介する迄もなく、廣島文理科大學に在つて永年の專攻により吾が國印度支那史の權威であり、金永鍵氏亦職をハノイの遠東學院に奉じ其の間同じき分野に探求の歩を進められた専門の士である。此の兩氏が期せずして、目下の情勢に相應しい南洋に於ける邦人の發展に關する資料を刊行するの舉を企て、緊密なる協力の下に、ものせられたのが本書であつてみれば、讀者は自ら本書に特別の期待をかけられて然るべきである。そして此の期待は、日本河の研究と題する第一篇及び日本河の地圖として掲げられた圖版集第二篇を仔細に披讀さる、時、確かに十二分に満足されるであらう。蓋し時局向きの一般出版物に往々にして認められる空疎な内容に引かへて、本書は其の前篇を精密なる學術的考究に當て、後篇亦貴重なる根本的資料の集成を以て形成されてゐるからである。

第一篇研究篇は四章に分れる。即ち日本河の稱呼を今日に傳へる最古の文獻、十七世紀初頭のオランダ人の記録より以下文書に存するもの十數種、同じく十七世紀オランダ人の作成に係る古地圖十數種を擧げて之を分類圖示し、其の使用字面の差異誤謬を比較校訂し、其等が何れも紛ふことなきメコン下流を指し示す日本河の稱呼なる點を明かにして第一章・第二章は結ばれてゐる。續いて其の名稱に該當すべき河流を比定するに充てられた第三章には、當時のオランダ人旅行記其他に依據して之を現今メコン河河口の最北流をブノン・ベン附近に迄遡る延長約百七十哩の河流に考證し、最後に日本河の起源を説いては、其が十六世紀以來既